佛教哲学玄義

子爵　渡邊國武　著

佛教哲学玄義講述開題

第一節　從前東西古今の間に起りたる宇宙観人生観の中で今日まで其勢力を持續して多少世道人心に向て其感化力を與へて居るのは印度系統と支那系統と希臘系統と猶太系統と波斯系統との五系統で有る

故に此五系統の宇宙観人生観に就て平心虚気に詳密精細に其長短を比較對照して其原理を研究検覈して見る印度系統の中で今こゝ二千五百餘年前に釈迦牟尼佛陀の首唱せられ迦葉所の佛教の中の因縁生の哲理を其理致の深遠思想の高妙で有て吾人々類を唯此哲学此宗教に依て救拯せらるゝ唯此哲学此宗教に依て最大幸福最大正義なる安心立命の地に到達し得可き最高至上の哲学なる宗教なりと有ると考へる

第二節　今日のめぢ宇内交文化の交通が非常に発達したる時世に在て此深遠高妙なる

東京帝國大學藏書

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）1085

最高至上なる佛教を一世を風靡し一万方を震蕩せるほどの実效実力ありしかくてそなりぬ筈で有る

然るに顧みる実際を見れば日本支那印度(子ボール国セイロン島)の佛教を概して之を言へば一の偶像教なる過きぬ有様で有る又英国佛教との諸国に随分熱心なる佛教研究者の續々輩出して「サンスクリット」語「パリー」語を研究して印度に遣つて居る所の佛教経論の原書なるものを新に研究して居るものも少からぬやうで有るが一人も佛教の真精神を直接触と発見したりのそれと言へるものも実に不可思議の現象で有る

第三節

今爲

然る所以を研究して見るに印度で哲学やら宗教やらの原理を紹述せるのも皆詩的即明的で有るから其真相実義を把握し看破せるさてこの已来ぬので有ると考へられる、

第四節

詩的と言ふのは印度で哲学やら宗教やらの原理を叙述するに一般の風習として皆小

ふと如き佛教の真理備道要素を発見しいも
のとそけきを世界の人類に向て明らかにする之
を説明して人々自己の認識力了解力思想力
判断力を以て なる程至當の道理で有ると信
用せしめやうとするものもそれと言ふのも
実に不可思議なる現象で有る

東京棒原製

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）1085

後的なる雄大壮麗なる叙事詩の中に其原理を包含せしめたるものにて有る華厳経法華経楞伽経維摩経等と皆其れにて有る夫の有名なる薄伽梵歌即ち「バガバドギーター」の如きも「ポニヤ」の戰場にて「ルジュナ」に對して「ヴィシュヌ」の化現キリシナ「ヴィシュヌ」の法を説く談話の中に數論と瑜伽論と「ヴェダンタ」の三派哲学を例示せんとしたるものにて有る華厳経のごとき深遠高妙なる哲学の原理を表示したるものにて有るけだしも哲学の原理として説かれ居る所なるべし皆釈迦牟尼佛陀の不可思議なる神通妙用として説かれ居る

第二相

志の一具を印度なるべしこれ希臘なるも始めを其れにて有つた夫の「エレヤ」哲学の完成者パルメニデスの哲学なるも三韓の叙事詩うち成り立て居る第一韓を馬に騎て金智の女神の處に行くことを叙述し第二韓第三韓を主として女神の教る所として第二韓を本覚道即ち純有無差別論を述へ第三韓を倒見道即ち「ピタゴラス」の宇宙論を述べたるものにて有る

明瞭洞徹なり議論もかくそれで其結論は於
て皆間違て居る其儘を何う言ふかと言
ふと其結論を一切之を理義は断ぜず佛陀の聖権即ち才ウリ
リテーに依頼すると言ふ事を有る
一体印度の五明の中の因明即ち論理学の要
素を古代から現量比量聖教量の三量を取つ
たので現量と言ふのを直覚的認識比量と
言ふのを思想力聖教量と言ふのを四吠陀聖
典と始として佛教ならば佛陀教ならば
論経（サンキヤ、ニヤヤラ）勝論ならば勝論経

又プラトーンの全集なども叙事詩であるに
過ぎず大抵其師ソクラテスと友人との談話の体
を脚色したるもの有るを希臘でもアリストテレスなど
とのみ皆倫理的直説法を用ひたるの印度でも
此風習が永く傳はりたるものと見へ夫の瑜伽
論の如きも無着が部淳天から毎晩弥勒菩薩(佛滅後七百年頃)
を招待して説法してもらふとか言ふものも
(弟子の首)
皆此詩的趣向の遺風で有る
其れで有るから仏教を研究するには此雄
大壮麗なる叙事詩の中から其中に含ませら
れて居る所の哲学宗教(ねい)の原理を見出して而
して後人に向て其れと説かるべきとするも
亦全く此詩的趣向と排除して文明世界普通
の倫理的経験的に之と違ひて行くのを
らぬので有る

第四節　第二に因明と言ふものは印度に五
明と言ふて五つの学問が有る

東京帝国大学図書之印

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）1085